

# mediopos 16

2015.11.27 ~ 2015.12.21

【神秘学ポエジー～風遊戯 第37集】

media-photo-poesie ヴァージョン

mediopos376-400

神秘学遊戯団



流行は不易へと至る

刹那と永遠

無常と常なるもの

時間と空間との

果てしない循環運動なのか

変わらないものを求めるために

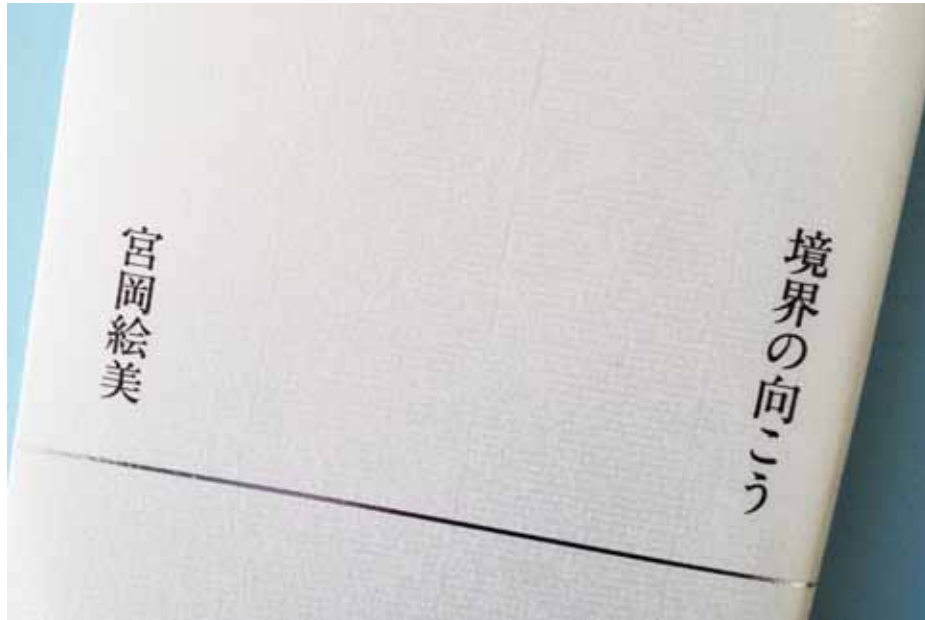
人は変わり続けるもののなかに

## ■山崎正和『装飾とデザイン』（中央公論新社 2015.11）

「文明史的に大づかみに見るならば、いまや造形は誕生このかた初めて、空間的な営みから時間的な営みに移りつつあるといえるだろう。衣装や化粧などの身体造形を先頭に、二十一世紀の都市では家具も什器も自動車も、さらに建築でさえ大小の波長を持つ流行によって動かされている。唯一の例外はいわゆる歴史的建造物であって、これだけには人は昔ながらの空間的な造形物として接している。その存在する場所を聖域として守り、補修し復元し、たえまない保護の手仕事を惜しもうとしない。そのみか人びとはしだいに歴史的建造物の範囲を広げ、昨今では十九世紀の建築でさえ保存の対称として珍重しつつある。だがいうまでもなくこれは現代人の時代感覚の逆説的な表現であって、万物の流行が痛感されていればこそ、不易なるものへの郷愁も強まっているのであろう。／それにしても、流行という現象のこの圧倒的な支配は、文明史的な意味のうえでいったい何ごとなのであろうか。表面だけを見ればそれは現代人の軽佻浮薄の表れのように見えるし、軽佻浮薄でしかありえない宿命の悲哀の表現のようにも見える。明らかに流行には何らの機能的な意味もないし、言葉によって伝えられるようなイデオロギー的な意味もない。だが人類の長い歴史を振り返ったとき、もっとも重大な精神現象はいつもその当時には合理的な意味もなく生みだされ、誰のものとも知れぬ意志によってひき起こされてきたのではないだろうか。じっさい「中世の騎士道」も「ルネサンスの精神」も、「近代の科学革命」すら当初は無名の精神の流行として始まり、後生の歴史家によって一つの集合意志の産物として命名されたものにすぎないのである。／考えて見れば、人間の身体造形は限りある命の造形であり、避けがたく始めと盛りと終わりのある存在の造形である。そして流行もまた同じように山型の波を打って変化し、例外なくいつかは死にいたる時間的な現象である。また個人の身体が理由なしに生まれて死ぬように、流行もまた同じく理由もなく始まって終わる不条理な経過である。さらにすべての生命の死がそれ自体のなかに再生の芽を含んでいるのに似て、流行もまた死に代わり生き代わりして永遠に続いてゆく。そう考えると現代の造形が人間の身体に収斂しつつあることと、それが流行に支配されつつあることのあいだには、偶然とはいえ関係があるのではないかと思われてくる。ひょっとすると二十一世紀の人類はまったくそれと知らず、史上初めての役割を造形に与え、それによって死と再生の循環を模倣して、生命のリズムを祝う採点をくり広げているかもしれないのである。」

mediopos-377

2015.11.28



■宮岡絵美（詩集）『境界の向こう』（思潮社 2015.10）

(HYbrid topology)

「そう、世界を変えることなど簡単だ／軽くひとつ飛びすればよい／思考は数億年の彼方までゆく／  
トポロジー、ドーナツからコーヒーカップへ／浮遊する地理空間には／あなたの微笑む顔が見えるよ  
うで／根源はいつも先に在る

無数の悲しみはどこへ向かうのか／導かれるままに流離い／寄せてはかえす影を掴もうと手を伸ば  
す／不揮発性メモリが積み重なってゆく／蓄積に次ぐ蓄積、霧のように碧く厚いその蓄積を／通り抜  
けてゆけば白い扉が開く／その揺らく神秘の果てまで／無限が拓かれる」

光の境界を超えて  
心はるか宇宙の無限へ  
けれども心はみずからを  
閉じ込めたりもする

光の速度を超えて  
心は時を超えて自由に  
けれども心は過去に生き  
みずからを縛ったりもする

光の照らすよりも明るく  
心は宇宙をかぎりなく照らす  
けれども心は闇よりも深く  
宇宙を暗く染めたりもする



凡庸さを愛せよ  
知を超えてあれ  
日常の中にある  
真実を見つけよ  
天は人の上にも  
人の下にも我を  
置いてはいない  
個性はそのまま  
我が我である事  
凡庸な我をこそ  
愛する我であれ

## ■若松英輔『内村鑑三を読む』（岩波ブックレット 2012.7）

「経験することがなくても何かを語ることはできる。だが、それはいつも概念であることに注意しよう。何かに「ついて」知ることに満足できるならそれでよい。だが、そのとき私たちの前に現れるのは、いつもつくられた虚像である。概念はときに人を驚かすが、真に人を動かすことはない。そてを可能にするのは実在にふれる経験である。／内村鑑三が今日も読まれるのは、彼が本当に感じ、生きたことを言葉にしたからである。内村の場合、読者はいっさい予備知識を求められていない。言葉の前に出て、ただ向き合うだけでよい。誤解を恐れずに言えば、意味が分からなくてもそのまま読み進めてかまわない。私たちのからだは、知解すること以外にも言葉を感覚する力を有している。私もそうしながら内村を読んできた。」

「天あるいは「天道」、「天徳」など表現は異なっても『代表的日本人』に描かれた五人はみな、「天」の働きを信じ、その促しにあくまでも忠実だった。西郷はそのなかでも、「天」との関係をもっとも鮮やかに、劇的に生き切った人物として、内村に認識されたのだった。さらに「天」を信じる西郷は、自己を深く信じる者でもあったと内村は指摘する。（・・・）「天」への信仰は、自己への信頼である。なぜなら、人が存在していること以上に明白な「天」の意図はないからである。自信とは、他者との比較において優位に立った者が感じる優位性ではなく、本来的に自身に対する信頼である。自信をもつとは、見失った自己と「天」への信頼を回復することである。それをひたすら試みる者の人生こそ、内村が『後世への最大遺物』でいう「高尚なる勇ましい生涯」にほかならない。（・・・）／内村鑑三の生涯が私たちに伝えるのは、彼の特異さではない。万人のなかに伏在している固有性である。問われているのは、いかにして個性的な人生を送るかにあるのではない。むしろ、凡庸に感じられる日常のなかに隠れた真実を見出すかにある。」

# mediopos-379

2015.11.30



■中村邦生『風の湧くところ』（風濤社 2015.10）

（山の記憶）

「何かを思い出そうとすると、なぜ人は顔を上げ、空を見つめるのか。記憶というものはいつも顔からふわふわ気泡となって漂い出し、宙を渦巻きながら虚空に蓄えられるからだ。虚空は地上から蒸発してきた、おびただしい記憶の素粒子でいっぱい。記憶の荷重が増しすぎると雨滴にまぶして地上に落とす。記憶はこうしてリサイクルされる。雨を浴びる私の記憶はバタゴニアの旅人のもの？／そこでこの夏、空の秘密を探りに、一七〇〇メートルの山小屋で十六日間過ごしてきた。記憶をまさぐりながら、私がいつも見上げる空の位置はおよそこのぐらいの高さだろうと推測しているからだ。／山小屋は雲海に包まれ、風がつつぎと沸き立つ。地上から運ばれた記憶の作る乱気流の何という美しさ。ぼんやり見惚れるばかりの忘我の日々を過ごした。そして快晴。記憶の全消去の潔さ。どどと素粒子を地上に撒き散らした後の爽やかさ。息を深くしながら、この清々しさに身を浸した。／下界への帰途、麓のアンティーク・ショップで茶色の登山棒を買った。うかつにも忘れていた。古い帽子には前の持ち主の記憶が糸と織りの隅々に絡みついていることを。私は埃を落とすように帽子をはたこうとした。しかしその手を止めて、誰かの思い出の詰まった古帽子を被った。白く切り立った山稜が脳裏で動き、西空が落日に燃えた。」

記憶はどこにあるのだろう

頭のなかにあるのではないようだ

虚空にあるのだろうか

大地にあるのだろうか

ときに記憶はあまりに重いから

逃れてどこかに行きたくなったりもする

そのくせいちばん大事な記憶を求めて

彷徨ってみたりもするのだ

そしてときおりだれかの

不思議な記憶に出会ったりもする

だれの記憶だったのかさえわからないままに

空を見上げその懐かしい物語を思い出そうとする

# mediopos-380

2015.12.1



留まっていたほうがいいことがある  
進みすぎるとみずからを危うくしてしまうから  
けれどたとえどんなに危くなるとしても  
どうしても進まなければならないときがある

単純で純粋なほうがいいことがある  
複雑すぎるとだれにもわからなくなってしまうから  
けれどたとえどんなに複雑になるとしても  
どうしても単純で純粋なままではいられないときがある

## ■星野博美『みんな彗星を見ていた』（文藝春秋社 2015.10）

「いろんな地域を旅するうちに、その地域の好みが変わったり引かれたりして、楽器は変化を続けてゆく。そして好評だった弾き方がその楽器の奏法として定着し、弾きやすいようにさらに改造され、あらたな名前が付けられる。／まるで生物の進化みたいだと思った。そして日本にキリスト教が入ってきた時代、リュートは進化の途上にあっただとはいえないか。レッスン中に、淳一先生がしてくれた話を思い出した。リュートは、進化しようとしすぎて淘汰されたのだ、と。／リュートは、チェンバロ、クラヴオ、クラヴィコード、ヴァージナルといった鍵盤楽器の登場に恐れおののいた。それらはリュートよりはるかに多くの音域を出すことができた。そしてリュートが伴奏していた歌曲の多くが、ライバルの鍵盤楽器に次々と奪われていった。／脅威を感じたリュートは、生き残りを賭けて進化を急いだ。そしてせっせと弦を増やし、棹はどんどん延びていった。その行き着いた先が機関銃のようなリュート、テオルポだ。／そしてある時、人間は気づく。弦が多すぎて右手の指が届きにくいし、長い棹の先端に左手が届かない。持ち運ぶのも一苦労だ。いつしかリュートは、自分たちの技術では到底弾きこなせない複雑な楽器になってしまった。／「そしてリュートは楽器の生存競争に負けてしまったんです」／リュートに比べると、マンドリンの選んだ道は正しかったと先生は言う。マンドリンは小ぶりなソプラノ・リュートの子孫だが、南イタリアの限られた地域だけで生きていくことを決心して進化を止めた。限られた機能と土地に特化することで、絶滅から免れた。いわば自らガラパゴス化することに成功したのだ。／「楽器は、単純なほうが生き残れるものなんですよ」

# mediopos-381

2015.12.2



語り得ぬものを語るために  
言葉と沈黙を召還せよ  
そして金へと変成させよ

見えぬものを見るために  
光と闇を召還せよ  
そして金へと変成させよ

聞こえぬものを聴くために  
声と星を召還せよ  
そして金へと変成させよ

知り得ぬものを知るために  
存在と無を召還せよ  
そして金へと変成させよ

## ■関口裕昭『翼ある夜／ツェランとキーファー』（みすず書房 2015.10）

「まず、キーファーもツェランもジャンルは異なるにせよ、錬金術を創作の中心に置いた現代の芸術家だということである。錬金術を基盤にして芸術を創造することは一見時代に逆行するようにも見えるが、特にキーファーがマイクロコスモスとマクロコスモスの対応に着目したことは、現代のエコロジー思想とも通底する今日性をもっている。／もちろん両者の創意もまた浮き彫りにされる。ツェランの詩は「灰」を起点とするが、これは強制収容所で焼かれた膨大な数のユダヤ人犠牲者のメタファーであると同時に、詩を形作るための素材、錬金術という第一資料（プリマ・マテリア）あるいは賢者の石ととらえることもできる。灰、すなわち言葉を召還して、溶解し、ふたたび一篇の詩として凝固させるという過程が、灰から金を産み出そうとする錬金術に重ね合わされているのである。このようにツェランはゲーテ、ノヴァーリスらロマン派の作家、バルザック、ボードレール、イェイツらの系譜に連なる錬金術への志向性を備えたヨーロッパの詩人として、しかもアウシュビッツの体験をきわめて独自の形で昇華させようとした詩人として位置づけることができる。さらにまた、このような視点からツェランの後期の詩をまったく新たに読み直すことも可能になる。／それに対してキーファーは鉛を起点にして、その変幻自在な歴史観をも変質させようとする。キーファーにおいて鉛、藁、灰、石、砂といった物質は歴史そのものである。キーファーが一九八二年以降、鉛を制作の中心に据えたのは、それが極めて変化しやすい流動的な媒体であるからだけではなく、鉛に秘められたメランコリーの性質、善と悪を備えた両義性にあつたと思われる。彼は一九八〇年にベネツィア・ビエンナーレで展示したナチス・ドイツの歴史を想起させる作品でドイツ人から非難を浴び、おそらくその反省からアウシュビッツという惨劇に正面から向かい合い、八一年には「死のフーガ」をテーマとする《マルガレーテ》および《ズラミート》連作を制作した。それらは善と悪、被害者と加害者、記憶と忘却など相反するテーマが錬金術的に溶け込んだ作品である。／鉛がこの時期あたりから本格的に制作に取り入れられたのは、その物質がもつメランコリーの性質がドイツの歴史を記憶するのにふさわしい物質であり、また流動性に硬直したドイツの歴史観が変容していく期待を託したからであろう。」



光あれ  
けれど光を見るためには  
眼が必要だ  
見えない光を見るためには  
心の眼が必要だ

どんな体験も  
経験となるとはかぎらない  
どんな知識も  
知恵となるとはかぎらないように  
どんな言葉も  
詩となるとはかぎらないように

■野村喜和夫『証言と叙情——詩人石原吉郎と私たち』（白水社 2015.11）

「経験はそれだけでは経験とはならない、とゲーテは言っている。他のもうひとつの経験によって乗り越えられたとき、初めてひとつの経験になる、と。存在の極限を生きたことによる単独者という経験、それは戦後において命名のファンタズムというもうひとつの経験によって乗り越えられたとき、はじめてひとつの経験、すなわち生きる喜びにまで高められたのではないだろうか。またリルケは、詩とは経験であると言った。敷衍するなら、しかじかの経験が、たとえどのようなつましいものであれ、長い年月の果てに一篇の詩へと結実するのであれば、詩人としてはもって瞑すべしである。詩それ自体が、経験を真に経験たらしめるもうひとつの経験なのだ。／繰り返そう。このくぼみ、このフェルナンデス。人生には、ささやかながら、ただそれ自体を輝かせるための純粋な出来事が、そのつどの恩寵のように訪れる可能性があるということ。あえていうなら、それはどんな弁証法的な神学の啓示よりも宗教的な法悦をさえ、石原にもたらしたのではないだろうか。そして、私たちにも。石原吉郎が私たちに、すくなくとも私にもたらしてくれた贈り物のうち、それがおそらく最大のものであろうと思われる。」



# mediopos-383

2015.12.4



■富岡悦子『パウル・ツェランと石原吉郎』（みすず書房 2014.1）

「神を絶対無とする思想を、ツェランがカバラ神秘主義のコスモロジー、ツィムツムから援用したとする指摘がある。（・・・）第四詩集『誰でもない者の薔薇』に収められた詩「あなたは向こうがわにいる」の第三連に、次のような詩行が見られる。

神は、そう私たちは読んだ。／一部であり、第二の撒き散らされた部分である！／すべての刈り取られた者たちの／死のなかで／神は成長して、自分になる。

（・・・）とりわけネリー・ザックスと深く関わった一九六〇年にこの詩は書かれているが、引用したこの箇所は、中世のユダヤ神秘思想家イサアク・ルーリアが唱えたツィムツムを示唆している。神の自己自存への撤退、ショーレムの言葉によれば、「神自身のある部分が神自身によって流瀆させられている」というツィムツムの思想は、ツェランがこだわりつけた神と悪との起源に関わっている。この世界は全知全能の神が創造したにもかかわらず、なぜこれほどの悪が存在しうるのかという命題に対し、それは十五世紀末スペインでのユダヤ人追放を体験した次世代であるルーリアが出した答えであった。／ルーリアによると、神の宇宙創造とは、神自身への撤退と、創造神としての自己展開を繰り返して続けられているとしている。それは、潮の満ち引きのような拡大と収縮の原理で成り立っており、いわば「神の、吸う吐くという呼吸の二重プロセス」として捉えられている。神が退去し収縮するさいに、神の裁きという現象が生じ、その裁きから善悪が生まれる。境界線を引くことによって、悪の存在が生まれるというのである。右に引用したツェランの「神は一部」であるという詩行は、こうした神の自己限定を示唆しているのだ。／一方、神が自己自身へ撤退することによって、世界に大いなる虚無である霊的な原空間ができ、そこに原初の人間と諸世界が創造される。原初の人間アダムの顔から流出した光によって、それを受け入れる器＝諸世界がいったん破壊され、その後アダムの額から修復力をもつ光が発せられると、世界はその欠陥を修復し復元されるという世界再創造の思想をルーリアは主張している。ツェランの詩の「神は、第二の撒き散らされた部分である」は、こうした神的光の放出に関わっているはずだ。」

神は撤退する

ならば

人も撤退するのか

神は全知全能だ

悪があるほどに

そして神は成長するか

人は自由だ

悪を許されるほどに

そして人は成長するか

光なきものがある

闇が広がるように

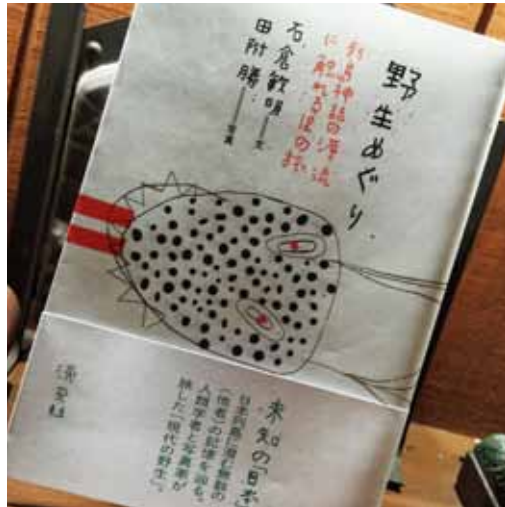
そして光は成長するか

悪が放出され

闇が放出される

そして破壊と創造を呼吸しながら

世界は常に再創造されているのか



■石倉敏明＝文・田附勝＝写真『野生めぐり／列島神話の源流に触れる12の旅』（淡交社 平成二十七年十一月）  
「現代文明は生々しい自然の力をコントロールして、社会を支えるのに都合のよい資源に作り変えてしまう。生き物を食べ物に作り変えたことを隠し、市場のルールを押しつけがましく他の生物にも強要する。そんな社会における観光は、せいぜい競争や産業に疲れた人々の癒しの場か、一時的な休息を提供するものとしてしか認識されていない。もちろん、そのような癒しも休息も観光地に「銭」を落とすことを期待され、最初から安全だと想定された市場に組み込まれているのだが。だからこそ、旅行中に出会う不慮の災害や想定外の事故は、社会に大きな動揺を与えることになる。／現代人の旅は、要するに徹頭徹尾、人間を中心としたプログラムによって最適化されてきたのである。無垢なる自然との出会いを求めるエコロジストの旅も、前人未踏の秘境を制覇しようとする冒険家の旅も、その意味するところはあらゆるものを情報化しようという人間中心主義の周縁部をなぞり、拡張する実践に過ぎなかったのではないだろうか。聖地めぐりも寺社参詣の旅も、それ自体が精神的な充足を自己目的化するものだとしたら、自分自身のちっぽけな解放にしかならないだろう。／しかし、私たちの前には、今生きている人間たちだけではなく、同時代を生きる動物や植物や菌類や目に見えない微生物がいるし、祖先や先住者の生活の痕跡や、彼らの残した未発掘の歴史や神話も残されている。日本列島に潜んでいる、あるいは私たち自身の身体のどこかに眠っている、そのような無数の他者の痕跡を、改めてたどり直すことはできないだろうか。／たとえ、手垢まみれの情報で埋め尽くされているように見えていても、世界には情報化されていない生々しい現実や、記録も共有もされていないような出来事があふれ、瞬間ごとに沸き立っている。それは日常化された、ごくありふれた生活の体験の外にあるものではない。むしろ都市と田舎とを問わず、年齢や性別や職業を問わず、今この時代を生きている人々が他の生物・無生物と一緒に産み出し、当たり前のように体験している出来事なのだ。」

冒険はどこにでもある  
いまここが冒険になる  
日常そのものが変わる

決められたことを  
決められたように  
決められた仕方  
なぞるだけの生が変わる

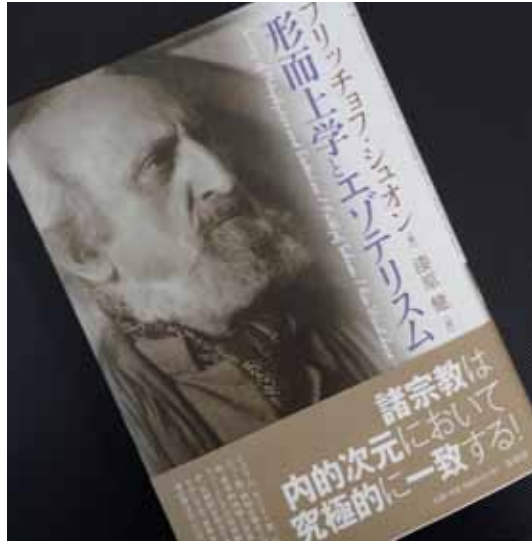
何を食べるのか  
何をみるのか  
それらすべてに  
野生を取り戻すことができる

世界のほとんどは  
ほんとうはわからないことだらけだ  
わからないことをわからないままに  
いつもはじめて出会うように向き合うことだ

非日常へと逃避する必要はない  
あなたに会うことも冒険になる  
じぶんに会うことも冒険そのものだ  
そのとき体験は経験になってゆく

# mediopos-385

2015.12.6



世界は幻か  
世界を見る目が  
幻を生むのだ

我は幻か  
我を見る目が  
私を幻にするのだ

まことに天に祈れば  
祈りは我が深みへと到るだろう

まことに我が深みへと到れば  
その深みは天へと到るだろう

マクロはミクロとなり  
アルファはオメガとなるだろう

ミクロはマクロとなり  
オメガはアルファとなるだろう

聖なるものへの祈りは  
我が真実となるだろう

愛深き知への道は  
我を聖なるものへと導くだろう

## ■フリチョフ・シュオン『形而上学とエゾテリスム』（春秋社 2015.11）

「二つの命題がヴェーダーンタ的思考を支配し要約する。『世界は虚偽でありブラフマンが真実である。』『汝はそれである』すなわちブラフマンあるいはアートマンである。第一の命題においては超越の観点、第二の命題においては内在の観点。／二つの観念はそれぞれの側で、あるいはそれぞれの仕方で、一性の神秘を説明している。前者は唯一性を表現することによって、後者は全体性を表現することによって。一つの現実について語ることは、それが唯一であるとともに全体的であるということである。一性は絶対的現実の本質あるいは何性である。さて、われわれが絶対的現実を超越性の相のもとに、偶然的なものとの関係のうちに見るとき、それは唯一性として現れる。なぜならそれはそれでないもの全てを排除するからである。そしてわれわれがそれを内在性の相のもとに、その顕現との関係のうちに見るとき、それは全体性として現れる。なぜならそれはそれを顕現する全てのもの、それゆえ存在する全てのものを含んでいるからである。一方においては、われわれの認識に対して「対象」である原理はわれわれの「上」にあり、それは超越している。また一方では、自己は、われわれの客体的な存在に対する関係において「主体」であり、——なぜなら自己はわれわれの客体的な存在を「考え」あるいは「投影」するからであるが——われわれの「内に」あり、内在している。すなわち現象は、絶対的現実を覆い隠す「幻影」であるか、あるいは逆に——一方は他方を排除するものではないが——示唆的にして象徴的な言語によってそれを延長することによってそれを開示する「顕現」である。」

「超越性と原理を指向する客観的観点は必然的に、内在と自己を指向する主観的観点へと導く。なぜなら、認識される対象の唯一性は認識する主体の全体性を要求するからである。自らの全てによらなければ、そのみがあるものを知ることはできない。そしてこのことは、霊性は、その深遠さと真正性の範囲において、何物もその外に残しえないという事実を明らかにし証明する。それは真理を含んでいるのみならず、美德を、そしてその延長によって芸術を含んでいるのである。一言で言えば、人間の全てを。／Vincit omnia veritas.（真理は全てに勝つ）。これによって次のように付け加えるべきだろう。Vincit omnia sancitas.（聖性は全てに勝つ）真理と聖性。あらゆる価値はこの二つの言葉の中にある。われわれが愛さねばならぬ全て、われわれがならねばならぬ全てが。」



時間が永遠だとすれば 始まりと終わりは存在しない つねに今が永遠なのだ 最後の日は存在しない	お金はただここに永遠にあり それは世界をただ巡っているだけだ	終わりは始まりだったとしたら 世界は永續のなかにあるだろう 歴史という変化する永遠のなかにある
時間が永遠だとすれば 私の始まりと終わり 生と死も本来存在しないだろう 私は常に存在だからだ	始まりということがあるならば 終わりということもあるだろう 始まりの前は無 終わりの後も無だとするなら 世界はそうにあるだろう	時間は無常か永遠か 世界は無常か永遠か お金は無常か永遠か 人は無常か永遠かをめぐって ぐるぐると問いを巡らせる
お金が永遠だとすれば お金は増えることも減ることもない	始まりということがあり 終わりということがあったとしても 始まりは終わりであり	

■大澤真幸「<世界史>の哲学 イスラーム篇」(講談社 2015.4)

「イスラーム圏において近代的な資本主義が速やかに生まれ、成長しなかった要因は、利子の禁止である。このような説が、俗に入りやすく、広く浸透してきた。コーランが微利を禁じていることは事実である。そして、利子が正当なこととして社会的に承認されていないならば、資本主義が速やかに成長するのは難しかろう、ということは容易に理解できる。／(…)だが(…)利子の禁止に原因を求めるこの説は、正しくない。(…)／初期の金融工学のような技術の開発が、資本主義への道を開いた。……とするならば、事情は、イスラム教のもとも変わらない。(…)合法的な行為の組み合わせのみによって、事実上は、「違法」とも見える目的を達成する方法を、アラビア語では「ヒヤル(奸計)」と呼ぶ。ヒヤルはもちろん禁じられていなかったし、禁じる根拠は、イスラーム方の中にはなかった。商行為においては、特にヒヤルが重要だった。」  
「ともあれ、利子についての禁則が、資本主義の誕生を阻む要因ではなかったとするならば、イスラームの何が障害になったのだろうか。(…)／林(智信)によれば、イスラーム圏で資本主義が誕生しにくかった最大の要因は、擬制的法人格が認められていない、とうことにある。法人の存在を認めないということは、イスラーム法の根本規定のひとつである。(…)／ウラマーたちは、こう説明する。法的に正式に承認される主体は、すべて神との契約で定められている宗教的な義務を遂行できるものでなくてはならない、と。宗教的な義務とは、「五行」のことである。たとえば、いずれかの会社を法人として正式に認定したとして、それは、日に五回の礼拝はできるのか、メッカへの巡礼はできるのか。もちろん、できない。とすれば、法人などというものは認められない。これがムスリムの領海である。／(…)それならばどうして、キリスト教のもとは法人な概念が究明され、それが広く使用されたのか、ということが疑問となる。同じように神との契約を根幹にもつ宗教なのに、キリスト教徒は、神と契約できる者のみが正式な法的主体だという限定にこだわらなかった。／(…)謎は、イスラーム教の方ではなく、キリスト教の方にあるのだ。」

「永續性の観念は、イスラーム教とは両立しない。それゆえ、ムスリムは、(永續性を前庭とする)法人の概念に対しても、無意識のうちに抵抗することになるのだ。イスラーム教のもとも資本主義が発達しにくかった原因も、ここにある。法人という仕組みを縦横無尽に活用できなければ、資本主義は成長できない。これが、林智信の論文の結論である。」

「イスラーム教もキリスト教も、その本来の設定からすれば、時間に内在する永續性という観念を受け入れることはできない。その根本的な理由は、時間が神の創造に基づいていることにある。時間には、始まりと終わりがあるのだ。始まりは、もちろん、天地創造のときであり、終わりは、最後の審判のときである。時間は有限で、短い。どちらの宗教にとっても、そのように感覚されているはずだ。最も長く持続するものでも、この始まりから終わりまでの時間幅を越えることはできない。／この根本的な条件に立ち戻ったとき、われわれは、キリスト教の方には、とてつもないひねりが入っていることに気づく。ある意味で、最後のときはすでに到来してしまっているのだ。その人は、つまりメシアは、もう来てしまっている。のみならず、その人は、われわれ全員の罪をすでに襲ってくれているのだ。だが、これは、本来であれば、最後の審判のときに起きるべきことではない。もちろん、キリスト教徒の考えでは、キリストはもう一度、ほんとうの最後の日にやってくる、とうことになっている。だが、そうだとすると、最後の日に起きるべき決定的な出来事が、すでに(一度)起きてしまっている、という奇妙な構成は変わらない。歴史の終わりの瞬間の出来事、本来的に未来に属することが、すでに過去のこととして生起してしまっている。宇宙の終わり自体を時間の中に組み込む、このような時間の感覚は、社会に、人間の精神にどのような影響をもたらすのか。これをわれわれは見定めなくてはなるまい。」

「ここにはひとつの逆説がある。それは、有限の時間の終わりが先取りされてしまったとき、時間がかえって永續化するという反転である。もう終わっているがゆえに、決しておわらないのだ。これと同じ形式の反転が、キリスト教世界の歴史に起きたのだとしたら、どうであろうか。」

# mediopos-387

2015.12.8



■サンジェルマン伯爵／マンリー・P・ホール（まえがき・解説）『三重の叡智／すべてのイニシエーション志願者が通過すべき十二の試練』（ナチュラルスピリット 2015.11）

マンリー・P・ホール（解説／第12章の分析と解釈）より

「自分の中にある対極の部分と出会い、それを一体化させることで、力や能力が質・量とも飛躍的に増し、秘儀参入者の潜在エネルギーは高められる。男性は自分の内にある女性性を見だし、吸収し、変容させる術を学ぶ必要がある。男性特有の力に女性的側面がもたらされ、完全な人間になれる。同様に女性も自分の内にある男性性を見だしなければならぬ。見だした男性性を女性エネルギーと融合させれば、唯一の存在にさらに近づける。／イシスが掲げている三つの球体は三つの実在、上から順に霊・魂・人格である（魂が白と黒に分かれているのは、永遠の精神的な魂と一時的で物質的な魂を区別しているからだ。）これら三つは硫黄・水銀・塩で表されることもある。／聖なる結婚の神秘を象徴的、そして秘教的に記した詩がある。聖なる結婚とは天において人間がなすべき婚礼で、自身の内にある陰と陽の側面を融合させて行う。真の意味で超人（アダプト）、つまり高次の存在となるための儀式だが、これは自身で宣言するといった性質のものではなく、神の側面である生命、意識、叡智の是認によって初めてなされるものだ。／極めて重要なこの結婚は、物質の奥底まで下っていった精神が、内部での融合を何度も繰り返し、進化を重ねた末、事故を不滅の存在の高みに上昇させる。純粋な愛情に基づいて男女間でなされる結婚になぞらえることもできなくもないが、一律化できるものではない。ここで述べている進化は、個々の性格や過去のカルマによって大きく違って来るからだ。」

「愛・叡智」は錬金術という賢者の石である。この力によって我々の行為、言葉、感情、思考、意志はみな、神聖なものに変容しうる。霊的な意味での金に変わるといふことだ。」

みずからの内なる二元論を見据えよ  
二元は統合へと向かわねばならない

見えていない対極を見つけよ  
見たくない対極を見つけよ

身体を拒むものは  
身体へと下らねばならない

精神を拒むものは  
精神へと上昇しなければならぬ

思考を避けるものは  
思考を磨かなければならぬ

感情を避けるものは  
感情を深めねばならぬ

意志を避けるものは  
意志を鍛えねばならぬ

みずからの影を敵とする者よ  
影そのものがみずからの見えない顔だと  
知らねばならぬ

みずからの内なる二元論を見据えよ  
そこにあらゆる問いは集約されて現れる



■片山杜秀『見果てぬ日本／司馬遼太郎・小津安二郎・小松左京の冒険』（新潮社 2015.11）

「小松左京と司馬遼太郎と小津安二郎。作家がふたりと映画監督がひとり。しかも SF 小説家と歴史小説家と現代劇の監督。彼らを一冊の本の中に並べるのは、不思議といえば不思議です。（・・・）順番に未来と過去と現在の代表者。未来が小松左京で、過去が司馬遼太郎で、現在が小津安二郎。三人合わせてひとつの全体になる。そういう割り振りのつもりです。」

「世の中には昔話の好きな人と、先のことを夢見がちな人と、それらをどちらも馬鹿馬鹿しく思う人が居るでしょう。単にそういう話と言えばそうなのですが、この凶式を政治思想や社会思想の領域の類型化にうまく使った人が居ます。二〇世紀ドイツのキリスト教思想家、パウル・ティリッヒです。／ティリッヒはワイマール共和国時代の著書『社会主義的決断』で、過去を根源と、現在を自律と、未来を決断と結びつけました。アウグスティヌスの回想と観照と期待とはおもむきがずいぶん違っています。アウグスティヌスは人間の日常の思いについて、ティリッヒは政治や思想について考えているのだから、言葉遣いがずいぶん異なってきます。」

「ティリッヒのワイマール共和国時代における発想の通りに、右翼（過去・根源）とブルジョワ民主主義（現在・自律）と左翼（未来・決断）との対立や葛藤やおきこに協調の歴史として、日本の近現代の思想の歩みをとらえてみる。それも応用に違いないけれど、ある意味、遠大すぎ、ある意味、当たり前すぎる。そうではなくてそれぞれをひとりの思想的人物に集約して三つを並べてみるというやり方も可能なのではないか。右翼とブルジョワ民主主義と左翼というようにないかにも凶式ではなく、たとえば、過去に遡るのが大好きな歴史家と、ひたすら日常現在を描くのが大好きな映画監督と、未来へと大風呂敷を広げるのが大好きな SF 作家という、いずれも私が長年愛してやまない三人を揃いにする事で、近現代の日本の思想史の大きな断面が見えるということはないか。／そこには戦争体験という切り口も欲しい。司馬遼太郎は昭和の軍国主義の矮小性を戦車兵として身をもって知り、その欠陥の発生と拡大を日本人の根源としての「モンゴル性」の喪失の過程ととらえようとして。小津安二郎は中国戦線での兵隊生活から、現在からは簡単に動けないと悟った人でしょう。現在という目前の厄介さに満ちた時間と淡々と無理なく合理的に効率よく知恵を絞って向き合い続けるだけでかなり精一杯になる。そんな現在を容易に大胆に変更しようといったものの見方にはしばしば無理が伴う。根源に遡ったり理想に飛躍するなどということは容易にできるものではない。目指すところを確実にとらえて、そのうえ、その目指すところに間違いなく到達できるようにするというのはとても難しい。でも、そのときはいつかは繰るだろう。そのいつかのために常に余力を蓄えておかねばならない。余力を蓄えながら厄介な現在に忍耐しなければならぬ。自らを計算ずくで律さねばならない。そういう信念を、戦争体験を軸として育てていって、現在に忍耐するとか言いようのない映画を作り続けました。小松左京は少年時の日本の敗戦の原因を、真の総力戦をなすにはあまりにも不真面目であったこの国の人々の性根に求め、真面目に全力を尽くすところに追い込んでゆけば、その方向で決断してゆけば、道は開けるというヴィジョンを示しました。」

この国のかたちは  
だれが決めているのだろう

過去の自分と  
現在の自分と  
未来の自分

三人合わせて文殊の知恵  
けれど知恵もなかなかまわりにくい

過去しかみない自分と  
現在しかみない自分と  
未来しかみない自分は  
それぞれ自分が  
国を背負っていると思いこんだりもする

問われないとき  
この国のことがわかった気になっているけれど  
問われたとき  
この国のことはさっぱりわからなくなる

わからないならわからないなりに  
そこからはじめてみるのがいいのではないかと  
なまじわかったふりがすべてを混乱させてしまうから



自分の眼の上の梁を見るためには  
自分を鏡に映してみなければならない  
人の眼の上の梁を見ても  
自分を見ることにはならないから

答えを得たと思った場所で  
考える力は止まってしまう  
答えが権威になってしまうのだ  
ときには逆走することさえも

考えるということは  
自分を鏡に映し  
問い続けるということだ  
そこにゴールはない

考えることには限界はあるけれど  
考えることさえできなければ  
考えることを超えることはできない  
土台のない建物は建てるができないように

■ジョン・ロック『知性の正しい導き方』（ちくま学芸文庫 2015.3）

「誰でも、他人や他の党派を誤りに導く偏見については進んで不平を言い、あたかも自分は偏見から自由であり、自分には何の偏見もないかのようにふるまうものです。偏見はあらゆる方向から攻撃されていますから、偏見が欠点であり知識の障害であるという点では人々の意見は一致しています。それでは、どのような治療法があるのでしょうか。誰もが、他人の偏見と関わることなく自分自身の偏見を検討する、という以外に方法はありません。他人から非難されて、自分は確かに偏見をもっていると納得するような人はいません。本人は同じやり方で非難を返して、動じないでしょう。無知と誤謬の大きな原因である偏見を世界から放逐する唯一の方法は、すべての人が公平無私の立場から自分自身を検討することです。他の人たちが自分たちの心を公平に扱おうとしないからといって、私の誤謬が真理になるでしょうか。あるいは、私が自分の誤謬を際になるべきであって、喜んで自分を欺くべきだということになるでしょうか。」

「心の能力は訓練によって改善されますが、その強さを超えるような負担をかけるはいけません。「両肩が何を運ぶだけの力を持ち、何を運ぶには耐えられないか」ということが、あらゆる人の知性の尺度にならねばなりません。」

「私たちの情念のどれかが、ある事柄を私たちの思考に推薦すると、それは一種の権威をもって私たちの心を占拠し、それを閉め出したり追い出すのが困難になります。あたかも支配する情念が、当分の間、民警団の一行を連れてきたその土地のシェリフとしての役を果たすかのように、その情念が持ち込んだ対象は、知性を捕らえて連行してしまいます。その対象が、そこで単独に考慮される法的権利をもっているかのようです。私の考えでは、どんなに穏やかな気質をもった人でも、この暴虐が自分の知性に加えられるのを一度は経験し、その不都合のもとで苦しんだことがあります。ほとんど誰もが、愛や怒り、恐怖や悲しみによって心が枷のようなものにしっかりとつなぎとめられ、その結果心を他のどんな対象に向けることもできなくなった経験が一度や二度はあるはずで、私はこれを枷と呼びます。それが心に覆い被さり、他の思索を追求する勢いや活動を妨害するからです。また、それが密着し事物を恒常的に固定するような場合には、知識が全くといって良いほど進歩しないからです。このような仕方で行きつめた人たちは、時には、あたかも最悪な仕方で行きつめられ、魔法にかけられたようになります。そのような人たちには、自分の目の前に現れるものが見えず、仲間が聞こえる声で話しているのにそれが聞こえないのです。」



なぜに答えはないけれど  
 なぜを問わずにいられない  
 数に答えはないけれど  
 なぜを問わずにいられない

私に心と体があるように  
 数にも心と体があって  
 世界にも心と体があって  
 心はなぜを求めてしまう

私に答えはないけれど  
 なぜを問わずにいられない  
 世界に答えはないけれど  
 なぜを問わずにいられない

体がすべてになったとき  
 なぜはどこかに失われ  
 世界は答えだけになり  
 私は意味をなくしてしまう

■高瀬正仁『近代数学史の成立・解析篇／オイラーから岡潔まで』（東京図書 2014.6）

「ぼくらは概念に伴う意味というものの実在を素朴に確信し、定義の文言は概念の意味の所在を指し示しているのであろうと考えがちなのではないかと思う。だが、もしかしたら「概念の意味」は存在しないのかもしれない、微妙な混迷を引き起こすのはこのあたりの消息である。／定義の文面に意味が伴っていないとすれば、数学の出発点は言葉そのものである。これこれの性質を備えた関数を正則関数と呼ぶというのであれば、それはそれだけのことで、定義を呑み込んで前へ進んでいけばどこまでも平坦な道が続いて終点に到達する。たいていの場合、敷居の低いステップが次々と登場するばかりで特別に困難なことは存在せず、前へ前へと進むばかりである。数学というのは万人に開かれているやさしい学問のはずだが、実際にはそうはならないのはなぜかといえば、感情が抵抗して定義の丸呑みを疎外するからである。／論理はやさしいが意味を把握するのはむずかしく、定義や定理を見ながら歩を進めると、そのつど、その一歩は何を意味しているのだろうかとついつい考えてしまいがちである。だが、何の意味も見えないのが普通であり、そのために途方に暮れて足を留めてしまい、先に進むのに困難を覚えるのである。虚心坦懐に実情を観察すると、定義や定理の文言には実は意味はなく、ないものを求めるのではないものねだりである。数学の定義に困難を覚える本当の原因はこのあたりに伏在する。／存在しないものを存在しないと認識すれば困難は消失し、数学はやさしい学問になるが、その代わりきわめて退屈である。退屈さに耐えるのもやはりつらいことであり、ここにもまた数学修行の困難の原因が存在する。」

「現在は抽象に本質を見る見方が支配している時代である。そこで、これに対抗して具象の意義を強調したが、人間にたとえると具象と抽象は心と体に対応する。不即不離というか、本来は対立してはならない関係である。具象には深さがあり、学ぶ喜びが伴うが、和算の特殊算にさらにひとつを付け加えてもマンネリになってしまう。具象が生きるためには抽象の枠組みが有効で、ガロアの代数方程式論からガロア理論を抽出することができたおかげで類体論の理論的枠組みが整った。岡の不定域イデアルの理論から層係数コホモロジーの理論を抽出することができたおかげで解析的连接層の概念が確定し、代数化して代数的连接層の概念が手に入り、代数幾何への応用が可能になった。抽象には抽象に特有の力強さがあり、議論を精密化する効果がある。」

「抽象には問題を解決する力はあるが、問題を生む力はない。これに対し、具象には数学そのものを創造する力がある。具象は難問を創造し、しばしば自分で作り出した困難にぶつかって立往生することがあるが、それ自身がまた創造の契機へと転化する。一九二〇年代から三〇年代にかけての抽象化の始まりのころからすでに、具象への回帰は抽象に課された大きな課題であり、今も未解決である。この課題こそ、数学の将来を左右する今日のアポリアと言わなければならないであろう。」





見ることで  
見えなくなるものがある

けれどほんとうは失われてはいないのだ  
ただ隠されてしまうだけ

聴くことで  
聴こえなくなるものがある

不思議をあたりまえにしてしまう魔法が  
すべてを隠してしまっている

言葉にすることで  
失われるものがある

蛙になった王子様を元に戻すように  
不思議を不思議に戻す魔法を！

大人になることで  
失われるものがある

## ■西平直『誕生のインファンティア／生まれてきた不思議、死んでゆく不思議、生まれてこなかった不思議』（みすず書房 2015.4）

「誕生のインファンティア」とは、誕生をめぐって子どもが体験する語り得ぬ不思議であるとともに、私たち大人の中にも現に働いている「不思議」である。子どもだからこそ感じる神秘が私たち大人の中にも働いている。残滓として保存されているのではない。アガンベンに倣って言えば、大人のコトバ（理解・概念）によって剥奪されるという仕方で構成される。私たち大人のコトバ（理解・概念）は淡く繊細な不思議を剥奪することによって成立し、しかし逆に、そうした不思議は、概念に剥奪されるという仕方で概念を制約し、互いに制約し合う仕方で、今も働いている（インファンティアは単なる可能態ではなく「潜勢力」であり、他方、大人の理解も単なる現実態ではなく、「現勢力」である）。／こうした意味において、本書における「インファンティア」は、「子どもの頃に感じた、言葉によって写し取ることのできない、在ることの不思議」である。」

「『語られた言葉』の背後には、多くの〈語られなかった言葉〉がある。その〈語られなかった言葉〉への思いが、私の中では、〈生まれてこなかった者〉への思いと、どこかで重なっている。〈語られずに消えていった言葉〉を『語られた言葉』と同じだけ愛おしく感じるのと同様、〈生まれてこなかった者〉を『生まれてきた者』と同じ切なさを持って感じる地平。『生まれてきた者』は、多くの〈生まれてこなかった者〉によって支えられている。」

「ハイデガーに倣って言えば、存在は、存在者として自ら顕現することによって、自らを隠蔽する。存在は決して存在者としては現れない。存在をコトバの内に納めることはできない。／しかしコトバの内には、存在が「自らを隠蔽した（身を引いた）」出来事の軌跡は残っている。その出来事を、コトバが「身を引く」ことによって、コトバの内に浮き上がらせることはできないか。コトバが停止する。子どもの頃の不思議の前に大人のコトバが停止する。その「すき間」のうちに、「存在が存在者として自ら顕現することによって自らを隠蔽する」出来事が蘇ってくることを願ったのである。」



言葉は世界を創る

言葉と言葉は出会い

原子や分子となり

化学変化を起こしたりもする

私はどのような言葉を使い

それをどのように結びつけているのか

言葉たちは私の鏡となって私を照らし出す

物語は世界を創る

物語には法則があり

物語関数に代入された言葉が

さまざまな解をつくりだしながら

またあらたな法則が見いだされてゆく

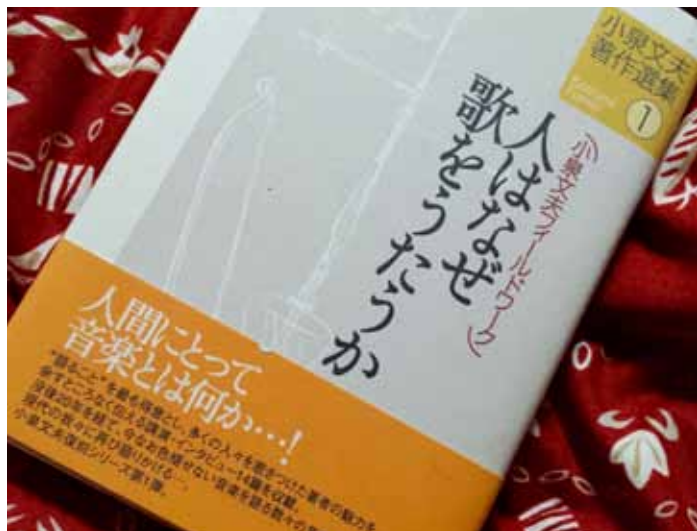
私はどのような物語を語り

それをどのように展開させているのか

物語は私の鏡となって私を照らし出す

■千葉俊二『物語のモラル／谷崎潤一郎・寺田寅彦など』（青蛙房 平成24年11月）

「私が文章を書くときに一語一語を選択し、いまこの瞬間にひとつの行為を選択することは、きわめて意識的な行為である。その一語一語の選択、ひとつひとつの行為の選択にかかわって、それを判断し決定づけるものは、いうまでもなく私の価値観であり、私の世界観であり、私のモラルである。もちろんそこに無意識が介在していたとしても、また主体としての私の意識を超えた規範が作用して、それに大きな影響をこうもっていたとしても、それらを含めて私のモラルといっても差し支えないだろう。／先に私は物語の法則ということを行い、Aという物質とBという物質とが接触すれば、そこにひとつの化学反応がおこって、Cという物質が生じるようなものだといった。たしかに物語といった高度に複雑な人間の産み出す生産物も、この自然界の物質の働きを制御している法則から逃れるものではないと思われるが、そうした法則に一元的に統合されるというものでもない。天候と同じように、あるパターンがあって数学的法則に従いながらも、二度と同じ軌道を繰り返して通るといったことがないのである。「物語」は、それを語るものにとっても、それを享受するものにとっても、それにかかわるものの意識において現象するものである。したがって、「物語のモラル」ということは、その物語にかかわるものの価値観であり、世界観であり、モラルである。「物語」には、あるパターンがあって物語的な法則に従いながらも、二度と同じかたちを示すことがない。物語を構成する一語一語が、その物語にかかわるものの価値観、世界観、モラルによって選択され、文学作品はそうした一語一語の初期値にきわめて鋭敏に依存しているからである。／「物語のモラル」という隲外の言葉を、私はこんな風に解釈している。そこにどんな物語（ストーリー）が展開されているかというばかりでなく、「物語のモラル」は物語を構成する言葉の一語一語の選択にまで貫かれているのである。」



日本といわれているものは  
ほんとうは日本ではないのかもしれない

私だと思いたいものの中に  
私を閉じ込めてしまうことで  
私は死んだ私になってしまう

日本だと思いたいものの中に  
日本を閉じ込めてしまうことで  
日本は死んだ日本になってしまう

潜在する私を自在に展開させることで  
はじめて私が顕れるのだから

潜在する日本を自在に展開させることで  
はじめて日本が顕れるのだから

私だと思っているものは  
ほんとうは私ではないのかもしれない

## ■小泉文夫著作選集1『人はなぜ歌をうたうか／小泉文夫フィールドワーク』（学習研修社 2003.7）

「郷土芸能の中には、たいへんおもしろいリズム感とか健康な旋律的表現があります。近世邦楽とは違うけれども、その他の江戸時代以前に発生したジャンルとは共通していて、何か、力強いバイタリティに富んだリズム、あるいは声の出し方とか、転調の仕方とかがみられる。それが近世邦楽の中に生かされているか、という、どうも必ずしもそうではありません。長唄だとか、その他、近世邦楽の中に出てくる民謡というものは変な否からしさというのを強調するために、ひなびた野暮ったさを強調するために、歪められた形のものが多いし、そんな具合だったから、本当の郷土芸能の中にあつたいろんなバラエティというものも、正しく全部は発展しきれないでできてしまったのです。／そういうふうにならぬとわかれわかれがみるときに、民族性というものをもっと潜在的なエネルギーにまで広げてみているわけです。実際には江戸時代には現れなかったのだけれども、江戸時代にもっとそれが現れてもいいはずだ、そのはずのものをわれわれはやはり民族性としてみていきたいわけです。／つまり民謡、わらべうたによって、一方ではそういう日本の伝統音楽全体に共通する一つの基盤というものが現れてくると同時に、もう一つ、民族性というものはいつでも働いているものだ、というとらえ方をしなければならないと思うのです。つまり日本の民族性というものを音階で言えばこういうものであり、リズムで言えばこうこうこういうものであるという見方は、基本的には必要ですけれども、しかしそれはいつでも新しいシチュエーションの中でもっていろんな形で発展し得るもの、変わってくるものとしてとらえなければなりません。そういう動いたもの、つまり生きたものとして、そういう特徴をとらえていかないと、かえって狭くなるわけです。／たとえば、日本の音楽をあんなふうアレンジしたらだめになってしまう、日本人にはああいうことは無理だ、ということになってきまして、日本の伝統音楽を生かす、のぼす、発展させる、と考えながら、だんだんと、それを狭い枠の中に閉じ込めてしまうということになってしまふのです。そうじゃなくて、新しい要素とぶつかり合ったり、それを取り込んだりするときに、そこに日本の民族性が現れてくる。そういう柔軟な動きと、このものを、エネルギーとしてみていかなければならない。私がわらべうたの中で学んだことは、まさにそのこと自体でもあるわけです。」



自分の心の動きを追えば

自分の心がどこにいて

どこに向かっているかがわかる

ロジックを追っているときも

エモーションを追っているときも

そこにはそれなりの形があるからだ

けれども心は矛盾を抱えながら働いている

今そうだとしたも

すぐに今とは矛盾しながら働き始める

今という時間の数直線の奥に

もうひとつの時間は広がっている

心はその広がりを生きているからだ

心は時間のなかを生きている

自分の心の点と点を結び

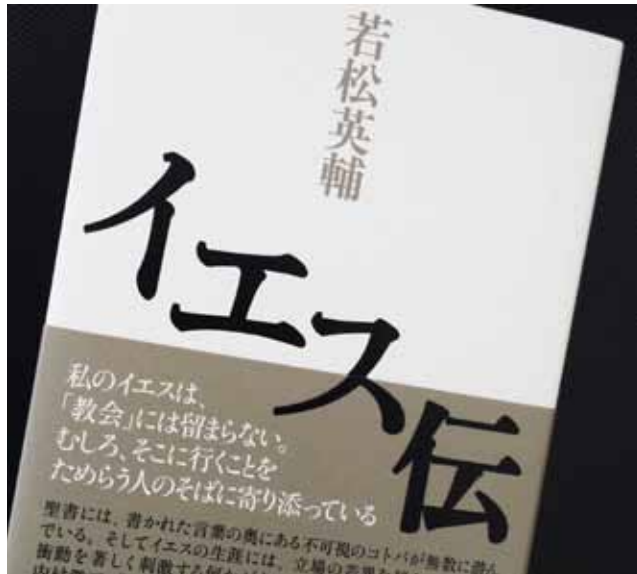
その動きが見えてくる新たな数学を！

■津田一郎『心はすべて数学である』（文藝春秋 2015.12）

「数学は心である——。／こう言うと、まるで耳なじみのない荒唐無稽なフレーズに聞こえるでしょうか。数学はロジカルなもので心はもっとエモーショナルなもの、まるで真逆に一する二つなのではないかと思われることでしょう。ところが、心という現象はいったい何なのかを考えるうち、物理、数学、カオス、複雑系、そして脳科学を科学者として研究してきた私は、ある種の必然としてこの結論にたどり着きました。（・・・）／私の素朴な印象では、数学の証明というのは心の動きを表現しているのではなうかと思われるのです。物理法則とは違って、数学は自然界の現象を表しているわけではありません。それ自体は宇宙の性質や気象など、何か現象を記述するためにつくられているわけではない。（・・・）／純粋数学では何ら現象を意識することがなく、数学的な対象に対する記述が行われます。また、現象数理であっても純粋数学と同様に証明をするときは、自然現象の説明ではなく、数学的对象に対する論理的帰結の連鎖として対象の数学的構造を理解しようとしています。」

「日常的な感覚と数学的な感覚にはズレがある。それは数学を苦手だと感じる人ほど強く思われるかもしれません。（・・・）／数学者にとって空間というのは数学的对象である一方で、一般的な人にとっては日常的な空間であって、その空間のいろんな出来事に心を働かせている。そしてだから数学という学問は、我々が日常的に心を働かせている心の動きというものをある種、抽象化させているとも言える。それならば数学の証明や定理を観れば、人の心の動き方について、何かヒントが得られるのではないか——これが「数学は心である」という発想の源なのです。」

「コンピュータの機能を支えるのは論理体系で成り立った緻密な体系である一方で、実際私たちがやっている心の動きは、このように離散時間を入れて推論をしてみるということ。論理には時間がない、しかし推論をするときには、そこに当然ながら時間が入ってくる。そして逆に、いろんな矛盾した命題が、時間を入れることによって矛盾のない推論形式のもとで解釈できるようになっていく。このことは私たちの心のありようを示しているように思われてなりません。時間のない論理は本来の心の動きからは遠く、むしろ論理に時間を入れた推論こそが心の動きに則していることがわかる。（・・・）／論理を微分方程式の形にして時間を入れようとしても、結局その解は時間がない時に出した解と同じものになる。矛盾はあくまでも矛盾、矛盾していないものは矛盾していないものそのまま変わらない。ではどうやって矛盾を回避できるのかというと、時間に幅を入れなければならぬわけです。時間に幅を入れることで離散的なステップ毎に推論を行い、矛盾を回避できる。人の推論という心の動きの基礎にある数学的構造には、幅のある時間が必要だということができるのです。」



■若松英輔『イエス伝』（中央公論新社 2015.12）

「人間の肉体が食べたものでできているように、私たちの魂はコトバによって育まれている。肉体の飢えが食物で満たされるように、魂の渇きはコトバによって満たされる。食物による飢えは、食べることでしか埋められないように、魂の渇きもまた、コトバによってしか満たされることはない。魂は「神の口から出るすべての言葉によって」生かされている。」

「福音書には、現代人が考える論証を最初から拒むような記述がある。この書物は読む者に、文字を追う目とは別な、もう一つの目を見開くことを強く促している。言語としての言葉の奥に、裸形の意味そのものとなった、隠された文字があることを暗示している。それは読む者の魂の中にだけ顕れる不可視なコトバである。／また、このときコトバと復活のイエスは同義である。福音書がそのコトバにふれる者のうちに生きているように、イエスもまた、コトバとして今も私たちの傍らに生きている、それが福音書を書いた者たちの信仰告白だった。」

魂が沙漠にあるときは  
魂の渇きを癒す水が必要だ

空腹を満たし  
味覚を満足させる食物も  
魂を満たすことはできない

人を驚かせる奇跡も  
病を癒せる技も  
魂を癒すことはできない

私たちは見えないコトバを求めている  
魂の渇きを癒すコトバを求めている  
私たちを復活させるコトバを求めている



裸が裸であるのは  
裸でないことを知るからだ  
裸が裸でさえないとき  
裸はそれと知られない

私が私であるのは  
私でないことを知るからだ  
私が私でさえないとき  
私はそれと知られない

私が私であるという恥ずかしさは  
私が私という裸を生きるからか  
私がさまざまなペルソナを身にまとい  
私であることを演じているからか

■ジョルジョ・アガンベン『裸性』（平凡社／2012.5）

「罪を犯す以前、アダムとエヴァの裸は恩寵の衣服に包まれていたために、二人は自分たちの裸を見ることができなかった、というような記述は、聖書には一切見られない。唯一確かなことは、アダムとエヴァがはじめは裸であり、しかも、恥ずかしいとは感じていなかったということである。（・・・）墮落のあとは一変して、二人はイチジクの葉で身体を覆うことが必要であると感じている。すなわち、神の命令に対する違反は、恥じる必要のない裸から隠されなければならない裸への変転を、必然的にともなうということである。」

「[子どものように]。幼児の裸こそ恥を感じる必要のない裸の模範であるという考え方は、たいへん古くから存在し、『トマスによる福音書』のようなグノーシス的テキストのみならず、ユダヤ教やキリスト教の資料のうちにも見てとることができる。生殖をとおして原罪が伝えられるとする教義は、当然のことながら子どもの純真さを否定するのだが（それゆえ、新生児の洗礼が実践されるようになったのである）、子どもたちが自分の裸を恥ずかしく感じていないという事実は、キリスト教の伝統においてしばしば、樂園の純真さに引き寄せて捉えられた。五世紀のシリアで書かれたテキストには、次のようにある。「聖書が「二人とも裸であったが、恥ずかしがりやしなかった」と言うとき、それが意味しているのは、子どもたちによくあるように、二人が自分たちの裸に気づいていなかったということである」。たとえ原罪の痕跡が与えられていようとも、自分の裸が見えていないがぎりは、子どもたちはいわば一種の辺獄のなかにとどまっている。アウグスティヌスがいうところの欲情 [libido] の出現を許す恥のことを、子どもは知らないのである。」



宇宙は  
発心し  
修行し  
成仏するか

人は成仏するか  
自然は成仏するか

宇宙とはなにか  
人とななにか  
自然とは何か

成仏するとは何か  
成仏するとき  
成仏するのは何か

あるがまは  
あるがままではなく  
あるがままへと向かい

我は我でなく  
他は他でなく  
宇宙は展開してゆくか

■末木文美士『草木成仏の思想／安然と日本人の自然観』（サンガ／2015.3）

「草木成仏論のもととなる無情成仏論はすでに中国でも論じられているが、その主流は有情が覺りを開くときに、環境（依報）である無情もまた覺りの世界となるという意味で、あくまで有情に依存するものであった。ところが安然は、当時の日本の天台の議論を受けて、『樹定草木成仏私記』において、草木が自ら発心・修行・成仏するという草木自成仏説を主張した。ただし、同書においては、それが十分に論証されるに至らなかった。『教時問答』を経て、『菩提心義抄』において、髓縁真如の思想が展開され、それによってはじめて有情と無情は同じ根源的な真如に由来するものとして同等視されることが可能になった。／安然以降、本学思想などで草木成仏思想がさらに展開されるが、根本の問題は、はたして有情と無情が同等視されるのか、それとも無情の草木は有情の主体性に依存するものと見るか、という点に集約される。両者が同等視されるのは、確かに無情の草木の独自性を認めることにはなるが、他方で自然に対する人間の責任を曖昧化する面が生ずる。無情の有情化とは、逆に言えば、有情の無情化でもあり、有情である人間もまた、無情である草木のように、あるがままに任せればよいという無責任論に陥る可能性を秘めている。その点で、有情の主体性を重視する立場もまた、考慮する必要がある。／ところで、有情と無情を同等視するということは、ただちに無情をすべて理解可能なものと考えることにはならない。むしろ逆である。人間であっても、理解可能な公共性を持つのはごく限られた面に過ぎず、多くの部分は理解不可能な他者性を持っている。それと同様に、自然も又、科学によって解明され、理解できるのはそのごく一部分に過ぎない。その大部分は理解不可能な他者の領域に属し、どんなに科学が発展しても解明しつくされることはあり得ない。巨大な堤防を築けば、どんな津波でも防げるなどと考えるのは間違っているし、原子力を制御できるなどというのは傲慢以外の何ものでもない。自然は一方で人間に限りなく優しいが、他方ではそれは恐ろしい他者でもある。／そのような他者領域の根底に深まってくとき、安然が「真如」と呼んだものが次第に明らかになっていく。それは万物が生成し、帰滅していくところではあるが、実体的に何かがあるわけではない。それは他者の他者性の根源ともいうことができ、ヒンドゥー教のヴィシュヌ神の持つ両義性とも比せられる。」



■ベルナード・リーヴァフッド『魂の救済／三人の偉大な人類の指導者の協働活動』（涼風書林 2015.12）  
「人智学の偉大な課題とは何でしょうか？ 物質の中の霊は人間の洞察を通して解放されることを待ち望んでいます。したがって、人智学は、物質、自然、宇宙、人間の本質を顧慮した《Erkenntnis》と関わっています。それがルドルフ・シュタイナーがもたらしたものです。」  
「地球を芸術作品に造り替え、地球の未来の受肉、いわゆる木星紀の萌芽として役立てるようにすることが、薔薇十字の流れの課題であると。人間によって作り変えられなかったものは、なんであっても見捨てられ、木星紀へと進むことができません。」  
「私はここには対極性があると考えました。一方には人智学の洞察があり、他方には薔薇十字者の具体的行為があります。それで私は中心もなければならぬと感じました。この対極の中でバランスをもたらす流れです。そうして私は考えました。この第三の流れは、魂と関わる、あるいは、より適切に言えば、魂の救済に関わる流れに違いないと。」「マヌが中心を形成します！彼の課題は人間の魂の発達です。というのも、それが継続する諸文化の目的であったからです。人間の魂の独立性を育成すること、最初は感受魂、それから悟性・心情魂、そして今は意識魂を育てることです。」

自然は高次の自然へと  
霊化されなければならない  
急ぎすぎず  
遅すぎもしないように

大地は芸術にならなければならない  
そのために人は生まれてくるのだから  
人は魂を育てなければならない  
そのために大地はあるのだから

善は悪を生むことを知らなければならない  
善は悪を供犠にして展開するのだから  
魂は救済されなければならない  
善なおもて救済さるいわんや悪をや





■伊津野雄二作品集『光の井戸』（芸術新聞社／2013.10）

「彫刻は かたちという言葉でかたられるものがたりには違いのないのだが いや かたちそのものなのだが しかしおそらく彫刻はかたちではない かたちでないものをつくるのに僕たちは かたちしか使うことができない／音楽（うたごえ）や詩（ことば）や美術（かたち）はすべて、ひとつのものから生まれているにちがいない ある image と 心のなかのかたちは大気のなかでゆれ振動し干渉する 世界をまきこんで、みずからをくりひろげ、おしひろげる。心のなかのうたが、世界の律動につながっているように。

image は 一枚の木の葉が 風であり光であり、そして樹そのものであるように存在する。／心とかたちが おなじものであればどんなにすばらしいか かつて人々が祈りのなかにもとめたかたち、もう一つの現実としての image が 人々の厳しい現実、運命をからくも生きぬくことをたすけたように この心のなかのかたちが 今も生きるための力を与えるものであることを切にねがう。」

見えるものが  
見えないものと  
おなじだったらいいのに

世界を照らしている光が  
見えない世界を照らしている光と  
おなじだったらいいのに

あなたの声が  
聞こえないあなたの声と  
おなじだったらいいのに

私の歌が  
聞こえない私の歌と  
おなじだったらいいのに

# mediopos-400

2015.12.21



■福岡伸一『芸術と科学のあいだ』（木楽舎／2015.11）

多田富雄『免疫の意味論』：免疫系では自己は空疎な欠落

「免疫系には、襲いかかってくる外敵——ウィルスや細菌、毒素など——に結合し、効果的に無力化する武器が準備されている。抗体である。免疫系は、どんなのが来襲するか、あらかじめ予想することはできない。／そのかわりどんな敵がやっても対応できるよう、ランダムに百万通りもの抗体を用意しておく。そのうちどれかが、侵入者にフィットすればいい。このランダムさが私たちを守ってくれる。風邪のウィルスが毎年どのように変異しようとも、あるいは未知の病原体が襲ってきても、私たちはなんとか戦い、人類は生き延びてきた。予想や目標を持たずランダムであること。これが最良の戦略だった。が、同時に最大の困難をももたらした。抗体はランダムに作り出されるがゆえに、中には外敵ではなく自分自身を攻撃してしまう抗体も存在する、という問題だった。／免疫システムはこの問題を回避するため、巧妙なしくみを編み出した。まだ外敵と出会うことのない胎児のある一時期、抗体を産生する細胞群は血液やリンパ液によって身体の中をぐるぐるまわる。ぐるぐるまわりながら、もし自分自身のパーツと反応してしまう抗体を作る細胞があれば、そのまま自殺プログラムが発動して自ら消え去ってしまうのである。／この選別が進行した結果、生き残った細胞が、非自己——自分ではない外敵——と将来戦うために保存される。逆に消え去ったものが自己なのだ。免疫系にとって自己とは空疎な欠落（ヴォイド）にすぎない。生物学を学ぶ者は、このあまりにも逆説的な生命の実相にまずは驚愕し、次いで感嘆する。／故・多田富雄は彼の代表作『免疫の意味論』の表紙に風変わりな絵（永井俊作・画）を置いた。自己とは、今いるあなたから切り抜かれたもの。世界の中心にいるつもりの自分は、実は何もないヴォイドなんだよ。だからさ、自分を探しに旅に出ても、自分などどこにも存在しない。彼の声はそうこだまして聞こえる。」

私は戦う

敵と戦う

襲ってくる敵

襲ってくるかもしれない敵

けれど戦っているのは誰だろう

そして誰と戦っているのだろう

戦っているのは私

戦っている相手も私

生き延びるために

戦っているのか

自分を消し去るために

戦っているのか

私は矛盾のなかで

ひとつのヴォイドを生きている